エミール・ガレの 1889 年パリ万国博覧会における不透明ガラス――鉱物の色調を模倣する関心の現れについて

居椿尚（慶應義塾大学）

19世紀末フランスを代表するナンシーのガラス工芸家エミール・ガレ（Émile Gallé, 1846-1904）は、1889年パリ万国博覧会のガラス部門でグランプリを受賞し高い評価を得た。好評を博したのは、大気のニュアンスやそれに伴う感情表現を可能とした不透明な色合いを含むガラス作品である。それは、同時代のバカラやサン・ルイといったガラス製造業者、及びガレ自身がそれまで主に制作していた透明性を基調とするガラスとは異なる特徴を持つ。

ガレは、本万博のガラス出品に際して審査員向けの小冊子『エミール・ガレによる1889年万国博覧会高級ガラス及び高級クリスタルガラスの製作に関する審査員向けの概要』（*Exposition Universelle de 1889. Groupe Ⅲ, classe 19(Cristallerie, verrerie, émaux). Notice remise au jury sur sa fabrication de verres et cristaux de luxe par Émile Gallé à Nancy*, Nancy: Imprimerie coopérative de l'est, 1889.）を執筆した。同書においてガレは、1878年以来開発してきたガラスの多彩な着色法のうち、複雑な色調を含んだものについて、鉱物（貴石、琥珀、翡翠、瑪瑙など）の色調を模倣する関心に言及している。この著作は、万博のガラス出品作に関する技法解説、工房の取り組み、芸術的意義を述べた一次資料として重要な位置を占めるが、これまで発表者が指摘する観点からは検討されてこなかった。本発表は、主としてこの著作の分析を通して、作風の転換期に制作された色ガラスの不透明性に、光との関係から鉱物の色調を模倣するガレの関心が深く関与している事実を明らかにすることを目的とする。

考察の過程においては、ガレが本格的にガラス制作に携わる前の活動にも着目する。ガレは、近年の研究で同定されている年代に即すと、1865年から67年にドイツのヴァイマルに留学している。このヴァイマルでの活動はヴァルター・シャイディヒを中心とする1970年代から90年代の研究に詳しい。この時期、素描や原型デザインを学んだヴァイマルの工芸研究所や父親が業務提携していたフランスのマイゼンタールのガラス工場で、ガレはガラス製造の基礎を育んだ。ここで発表者は、先行研究が詳細を明らかにしていないものの、ガレがヴァイマルで鉱物学を学んだ事実を看過できないとして捉える。

一次資料を補完する文献として、ガレと同時代の批評家等の 1889 年万博に関するガラス批評や評伝を挙げる。一方、こうした二次資料から、日本美術や中国ガラスの影響を受けたガレより一回り年上の工芸家フランソワ＝ウジェーヌ・ルソー（François-Eugène Rousseau, 1827-1890）を中心に、ガレが彼らと共通の関心を有していた可能性を指摘する。とりわけ発表者は、ガラスによる鉱物の色調の再現にはガレの意図として光の問題が関与するとの考察を試みる。以上の検討、ならびに発表者が 2025 年 3 月にパリとナンシーで実施した文献資料調査を通じて、ガレが芸術的かつ学術的関心から生涯取り組んだ植物学の視点から迫る近年のフランソワ・ル・タコンをはじめとするガレ研究に対し、鉱物学的観点からアプローチする意義を主張する。